

太宰治「瘤取り」論

——戦時下の文学観を中心に——

申 舌 禾

はじめに

「瘤取り」は、『お伽草紙』所収の四篇の中で最初に書かれた作品である。太宰治は、十五年戦争中の一九四五年三月末、妻子を甲府に疎開させた時期に「前書き」と「瘤取り」を書き始め、その後、同年四月二日の爆撃のあと、自分も慌てて甲府へ疎開し、そこで「瘤取り」を完成させた。父なる語り手が防空壕の中で、窮屈さに苦しむ娘をなだめるために、絵本を読んで聞かせるという「前書き」からは、「瘤取り」を書いた太宰治の状況と同時に、当時の状況も窺うことができる。このような戦時下という状況にもかかわらず、明るくて面白い作品を書いたことにこの作品の意義があると思われる。「瘤取り」について浦田義和は「勸善懲惡式の人々を教え訓すという上からの倫理に反発し、前のお爺さんの場合は、夢を追求する者が現実主義に受け入れられぬ悲劇、後者は現実にごだわるゆえに結果的にいつそう現実から苦しめられることになる喜劇を描いている」¹と述べ、長谷川泉は「本質的に、太宰にとっては、倫理的な観点か

らものを考える興味を失っていることが先行している²」と述べている。このように「瘤取り」の先行研究では、昔話の勸善懲惡の倫理から脱し、因果関係が成立しない物語であることを認めており、そのためか、最後の「性格の悲喜劇」という語り手の言葉をそのまま受け入れている傾向がある。本稿では、「瘤取り」の内容を分析しつつ、そこに見られる太宰の文学観を時代背景とともに考察したい。

一 価値観の対比とその相対化

「瘤取り」について語り手は最後に次のように語っている。

この物語には所謂「不正」の事件は、一つも無かつたのに、それでも不幸な人が出てしまったのである。それゆゑ、この瘤取り物語から、日常倫理の教訓を抽出しようとする、たいへんややこしい事になつて来るのである。それでは一体、何のつもりでお前はこの物語を書いたのだ、と短気な読者が、もし私に詰寄つて質問したなら、私はそれに対してかうでも答へて置く

より他はなからう。

性格の悲喜劇といふものです。人間生活の底には、いつも、この問題が流れてゐます。

この文章で語り手は、この話が、単純に昔話がついている因果応報の教訓を伝えるものでないことを言い、短気な読者に応えるために「性格の悲喜劇」という言葉を使っている。しかし、「瘤取り」には、「性格の悲喜劇」とある程度重なりつつも、実は別の意味が秘められているように思われる。語り手が本当に言いたいことは何だろうか、それを考えてみたい。

お酒好きのお爺さんは孤独で、家庭では常に浮かぬ顔をしている。しかし、別に悪い家庭ではない。七十歳近いお爺さんの妻であるお婆さんは「無口であつて、ただ、まじめに家事にいそしんでゐる」。また、四十近くになつている息子は、「品行方正、酒も飲まず煙草も吸はず、どころか、笑はず、よろこばず」で、近所の人々も「畏敬せざるはなく、阿波聖人の名が高く、妻をめとらず鬚を剃らず、ほとんど木石ではないかと疑はれる」くらいで、お爺さんの家庭は「実に立派な家庭」なのである。

「もう、春だねえ。桜が咲いた。」とお爺さんがはしやいでも、「さうですか。」と興の無いやうな返辞をして、「ちよつと、どいて下さい。ここを、お掃除しますから。」と言ふ。

お爺さんは浮かぬ顔になる。(略)

「時に、なんだね、」とお爺さんは少し酔つて来ると話相手が欲しくなり、つまらぬ事を言ひ出す。「いよいよ、春になつたね。燕も来た。」

言はなくたつていい事である。

お婆さんも息子も、黙つてゐる。

「春宵一刻、価千金、か。」と、また、言はなくてもいい事を呟いてみる。

「ごちそうさまでござりました。」と阿波聖人は、ごはんをすまして、お膳に向ひうやうやくしく一礼して立つ。

お婆さんはまじめで、息子も世間から畏敬される聖人のような人物であるのに対して、お爺さんは、お酒好きで、言わなくてもいいことを言う人物である。ここには、相反する二つの特徴が明瞭に書かれている。

お爺さんは淋しさうに笑ひ、

「こりや、いい孫が出来た。」と言つたが、息子の聖人は頗るまじめに、

「頬から子供が生れる事はござりません。」と興覚めた事を言ひ、また、お婆さんも、

「いのちにかかはるものではないでせうね。」と、にこりともせず一言、尋ねただけで、それ以上、その瘤に対して何の関心も示してくれない。

お酒好きのお爺さんの瘤に対する冗談は家族には通じず、冷淡な態度であしらわれてしまう。また、近所の人々は、瘤が邪魔だろうと思って同情するのである。そして、左の頬に瘤を持っているもう一人の近所のお爺さんは、「人品骨柄は、いやしく無い」、「なかなか立派」で、近所の人々から「旦那」、「先生」と呼ばれているが、このお爺さんは瘤を自分の出世のさまたげだと思っている。このように、世間では瘤というのは何の役にも立たないものにすぎないのである。それに対し、お酒好きのお爺さんは、その瘤を孫のように可愛がり、孤独を慰めてくれる存在と思うのである。ここまで見ると、瘤を邪魔だと思う世間と瘤を大事に思うお酒好きのお爺さんとは、その考え方が異なることが分かる。佐藤厚子は『お伽草紙』の登場人物の造型について、「主人公をはじめとする登場人物には、いずれも一定の類型性が付与されている。より正確に言えば、彼らはそれぞれ典型的人物であるかのように、つまり、特定の種類に属する人間ならば必ずそのような性格を有するものであるかのように語られるのである。」と述べている。佐藤の指摘のように、「瘤取り」に登場する人物は、個々の個性を表すのではなく、ある「特定の種類の属する人間」を表していると言えるだろう。つまり、「瘤取り」は、登場人物を単純化・類型化して描くことによって、ある「種類に属する人間」の考え方や、価値観を表していると言える。さらに佐藤厚子は、妻と息子は「無駄」を理解しない種類の人たちであり、「これに対して、主人公は〈無駄〉に生き〈無価値〉に価値を見いだす人物である」と述べている。しかし、主人公と家族で違うのは、価値の考え方だけであって、主人公を「無駄」に生き〈無価値〉に

価値を見いだす人物」とまでは言えないのではないだろうか。つまり、瘤は、世間から見れば無価値で邪魔かもしれないのだが、お酒好きのお爺さんから見れば価値があるという程度のことであって、〈無価値〉に価値を見出すとまでは、言いきれないのである。それはともかくも、お酒好きのお爺さんの価値観が世間の価値観からだいぶ外れたものであることはたしかである。お酒好きのお爺さんの存在自体、世間から見れば価値の無い瘤と同じようなものでもある。要するに、「瘤取り」の中で、世間の価値から外れたお酒好きのお爺さんは、世間の価値のあることに従うお婆さんと息子、また近所のお爺さんとは、はっきりした対比をなす人物として描かれているのである。

それでは、お酒好きのお爺さんが考える価値は何だろうか。これを時代状況とともに考えてみたい。当時は、十五年戦争の時期であり、「前書き」にもあるように、人々は空襲の中で切羽詰まった思いで生きていた。そのような状況の中では、戦争の役に立つことが世間の価値であったことはたしかだろう。「瘤取り」の中で、お酒好きのお爺さんは「まじめにも、程度がありますよ。阿波聖人とは恐ろしい。お見それ申しましたよ。偉いんだつてねえ。」と言っているように、世間が言う価値に従って、度を超えた息子を擁護している。戦時下という状況の中では、戦場で一所懸命戦って直接戦争に役に立つ人がいれば、戦争に何も役に立たない人々もいるわけだが、お酒好きのお爺さんは、その戦争に役に立たない代表的な人物とも言える。お酒好きのお爺さんはお婆さんのようにまじめに生活しているわけでもなく、世間から尊敬される息子のように素晴らしい人物

でもないのである。しかし、お酒好きのお爺さんは、春が来ることを喜び、自分の瘤に愛情を持ち、冗談をよくいい、人生を楽しむ享楽精神を持っているのである。この享楽精神は、戦時下ではほとんど無価値かもしれない。しかし、全く価値が無いとは言えないだろう。

お酒好きのお爺さんのこのような人生を楽しもうとする価値観が評価されるのは、実は、現実の世界ではなく、異界の鬼の世界においてであった。山の奥、春の下弦の月の夜、お酒好きのお爺さんは、虎のふんどしをした赤い巨大生き物である十数匹の鬼たちが気持よく酔っ払い、踊っている酒宴のさまを眺めていた。だが、鬼たちの低能の踊りに呆れて、「なんてまあ、下手な踊りだ。ひとつ、私の手踊りでも見せてあげませうかい。」と呟き、「鬼どもに対し、親和の情を抱いて」いい声で歌いながら阿波踊りを踊ってみせたのである。鬼どもはたいへん喜んで、また今度も踊りを見せてくれるように、その約束の印に、てかてか光って宝物に見えたお爺さんの瘤をむしり取ったのである。世間から見れば価値の無い瘤が、鬼たちにとっては、享楽精神の象徴のように見えたのである。

このようにしてみると、「瘤取り」は、性格の悲喜劇のようにも見えるが、その中には価値観の対比を内包していると言えるだろう。太宰は、明白な対比をなしている二つの価値観を提示することで、当たり前だと思っていた当時の価値観から少し離れて考える必要性を示しているのではないだろうか。

このような価値観の相対化は太宰治の文学観とも繋がる。次節では価値観の相対化を太宰治の文学観に関連付けて考えて行きたい。

二 文学と鬼の関係について

お酒好きのお爺さんが山の奥で鬼の宴会を眺める場面で、突然語り手は「鬼」という言葉に託けて長広舌を振るう。ここで、文学にかかわる「鬼」について見てみよう。

また一方に於いては、文壇の鬼才何某先生の傑作、などといふ文句が新聞の新刊書案内欄に出てあたりするので、まごついてしまふ。まさか、その何某先生が鬼のやうな醜悪の才能を持つてゐるといふ事実を暴露し、以て世人に警告を発するつもりで、その案内欄に鬼才などといふ怪しむべき奇妙な言葉を使用したのもあるまい。甚だしきに到つては、文学の鬼、などといふ、ぶしつけな、ひどい言葉を何某先生に捧げたりしてゐて、これではいくら何でも、その何某先生も御立腹なさるだらうと思ふと、また、さうでもないらしく、その何某先生は、そんな失礼千万の醜悪な綽名をつけられても、まんざらでないらしく、御自身ひそかにその奇怪の称号を許容してゐるらしいといふ噂などを聞いて、迂遇の私は、いよいよ戸惑ふばかりである。あの、虎の皮のふんどしをした赤つらの、さうしてぶさいくな鉄の棒みたいなものを持つた鬼が、もろもろの芸術の神であるとは、どうしても私には考へられないのである。鬼才だの、文学の鬼だのといふ難解な言葉は、あまり使用しないほうがいいのではあるまいか、とかねてから愚案してゐた次第であるが、しかし、それは私の見聞の狭い故であつて、鬼にも、いろいろの

種類があるのかも知れない。

この文章に対して長谷川泉は「鬼の種類に託して、太宰の文壇批判が、痛烈な皮肉をこめて展開される。「文壇の鬼才」や「文学の鬼」などという、一般に用いられている俗称に対して痛烈に噛みつけているのである」と述べ、「如是我聞」の志賀直哉を取り上げているが、その論は、戦後の議論を先取りしており、適当ではない。当時、実際「文壇の鬼才」と呼ばれた作家は芥川龍之介で、「文学の鬼」と呼ばれた作家は宇野浩二である。⁵⁷宇野浩二は自ら「文学の鬼」と自称し、純文学に対する熱意が強かった人物である。また、宇野浩二と交友関係のあった芥川龍之介が、当時文学を芸術として完成するために形式的に、技術的に、多様な工夫をして来たことは言うまでもないだろう。このような「鬼」と呼ばれた二人の文学は、当時太宰治を選んだ「俗な文学」（一般の読者のための文学）とは全く違う方向性を持つものであった。語り手がここで「文学の鬼」という言葉に疑念を投げかけているのは、ひたすら高い精神を以て芸術の完成を目指すことが、必ずしも良いことではないと考えているからではないだろうか。「文学の鬼」の話の後に、お酒好きのお爺さんの享楽精神と、息子の聖人精神が対比される場面が出てくるのも偶然ではないだろう。

三 太宰治の傑作意識の変化

お酒好きのお爺さんの踊りが鬼たちを大変喜ばし、瘤を取られたのに反して、近所の立派なお爺さんは失敗して鬼たちを怖がらせ、

鬼たちが宝物だと思っていた瘤を譲られ、二つの瘤を持つてしまう。まず、この場面で見られる二人のお爺さんの踊りを比較してみよう。お酒好きのお爺さんの踊りは、阿波の地方の俗な阿波踊りで、「大谷通れば石ばかり／笹山通れば笹ばかり」という阿波の俗謡を歌いながら「軽妙に踊り抜く」。一方、近所のお爺さんは「鉄扇はらりと開き、屹つと月を見上げて、大樹の如く凝然と動かず」、「是は阿波の鳴門に一夏を送る僧にて候。」云々、格調高い歌を歌う。そして、「そりりとわづかに動いて、またも屹つと月を見上げて、端然としたポーズをとる。この踊り方は、お酒好きのお爺さんの俗な趣とは正反対の格調高い趣を持ったものである。ここで近所のお爺さんの失敗の原因が「傑作意識」にあることに注目したい。

お旦那は、出陣の武士の如く、眼光炯々、口をへの字型にぎゅつと引き結び、いかにしても今宵は、天晴れの舞ひを一さし舞ひ、その鬼どもを感服せしめ、もし万一、感服せずば、この鉄扇にて皆殺しにしてやらう、たかが酒くらひの愚かな鬼ども、何程の事があらうや、と鬼に踊りを見せに行くのだから、鬼退治に行くのだから、何が何やら、ひどい意気込みで鉄扇右手に、肩いからして剣山の奥深く踏み入る。このやうに、所謂「傑作意識」にこりかたまつた人の行ふ芸事は、とかくまづく出来上るものである。このお爺さんの踊りも、あまりにどうも意気込みがひどすぎて、遂に完全の失敗に終つた。

「傑作意識」について、渥美孝子は「立派なお爺さんが鏡に写つた

自分の瘤を見るといことは、客体化された他者としての瘤を、主観化された他者のまなざしで見ることにはかならずなく、「このお爺さんの踊りの失敗も、こうした他者のまなざしを先取りすることにによる意識のこぼり、すなわち、「傑作意識」のせいということになる」⁸⁾と述べている。瘤を出世のさまたげに考え、瘤のため嘲笑せられて来たと思う近所のお爺さんにとって、「傑作意識」は他人のことを意識しすぎた結果であることはたしかである。近所のお爺さんが踊りを踊った時には、瘤が取られた後の出世のことや、他人からの評価が上がることも意識されていたかもしれない。「傑作意識」は、自己満足ではなく、他人の評価を意識することに発するものである。瘤を取られた後も「一長一短といふやうなところか、久しぶりで思ふぞんぶん歌つたり踊つたりただけが得、といふ事になるかな？」⁹⁾と言ひ、楽しむことに目的を置いて満足するお酒好きのお爺さんの姿勢とは全く異なるのである。

ところで、太宰治は、かつて自分の作品の中で「傑作意識」について書いていた。

毎夜、毎夜、傑作の幻影が彼のうすつぺらな胸を騒がせては呉れるのであつたが、書かうとすれば、みんなはかなく消えうせつた。だまつて居れば名を呼ぶし、近寄つて行けば逃げ去るのだ。
〔「猿面冠者」(一九三四)〕

フロオベエルはお坊ちゃんである。弟子のモオパスサンは大人である。芸術の美は所詮、市民への奉仕である。このかなしい

あきらめを、フロオベエルは知らなかつたしモオパスサンは知つてゐた。フロオベエルはおのれの処女作、聖アントワヌの誘惑に対する不評判の屈辱をそそがうとして、一生を棒にふつた。所謂刳瘵の苦勞をして、一作、一作を書き終へるごとに、世評はともあれ、彼の屈辱の傷はいよいよ激烈にうづき、痛み、彼の心の満たされぬ空洞が、いよいよひろがり、深まり、さうして死んだのである。傑作の幻影にだまくらかされ、永遠の美に魅せられ、浮かされ、たうとうひとり近親はおるか、自身自身をさへ救ふことができなんだ。(「逆行」(一九三五)¹⁰⁾)

太宰治の初期作品からは、「傑作」を書くことを目的とすべきか、「市民への奉仕」、つまり大衆が喜ぶ作品を書くことを目的とすべきかといふことの間で悩んでいたことが窺われる。その悩みの中で太宰治は、初期には「傑作」を目指すことを選んだのである。しかし、次の中期作品の「傑作」に対する言葉を見れば、そのような「傑作」に対する執念が減少して行くことが分かる。さらに、中期の末に到つては、かえつて「傑作意識」を批判しているような態度が見えて来るのである。

駄作だの傑作だの凡作だのといふのは、後の人が各々の好みできめる事です。作家が後もどりして、その評定に参加してゐる図は、奇妙なものです。作家は、平気で歩いて居ればいいのです。五十年、六十年、死ぬるまで歩いてゐなければならぬ。「傑作」を、せめて一つと、りきんでゐるのは、あれは逃げ支度を

してゐる人です。それを書いて、休みたい。自殺する作家には、この傑作意識の犠牲者が多いやうです。〔『風の便り』(一九四一)¹¹⁾〕

昨年の暮、私は二つの映画を見た。『無法松の一生』とかいふのと、『重慶から来た男』といふ映画である。さうして、『無法松』はたいへんつまらなかつた。「芸術的」といふ努力は、なんてもあ古いもんだらうと思つた。阪妻はヤニングスみたいな熱演で、私は阪妻に同情したが、しかし、いいとは思へなかつた。阪妻に対する不満ではない。『無法松』といふ映画に対する不満である。どこがいいのか、私には、さつぱりわからなかつた。傑作意識を捨てなければならぬ。傑作意識といふものは、かならず昔のお手本の幻影に迷はされてゐるものである。だからいつまで経つても、古いのである。まるで、それこそ、筋書どほりぢやないか。あまりに、ものほしげで、閉口した。「芸術的」陶酔をやめなければならぬ。始めから終りまで「優秀場面」の連続で、さうして全体が、ぐんなりしてゐる。「重慶から来た男」のはうは、これとは、まるで反対であつた。およそ「芸術的」でない。優秀場面なんて一つもない。ひどく皆うるたへて走り廻つてゐる。けれども私には、これが非常に面白かつた。決して「傑作」ではない。傑作だの何だのそんな事、まるで忘れて走り廻つてゐる。〔『芸術ざらひ』(一九四四)¹²⁾〕

このように、太宰治の「傑作」に対する意識は、初期から中期にか

けて変化が見られるのである。近所のお爺さんの「傑作意識」の場面は、太宰治の初期作品に見られる「傑作意識」の反映と、「傑作」に拘つていたことに対する自嘲と言えるだろう。これは、太宰治の文学観の変化でもある。太宰治の作風は、初期の「傑作」を意識した実験的な作品から、一般の読者向けの明るくて面白い作品に変わったのである。太宰治にとつて中期は、初期の「傑作意識」の悩みから脱出し、自分の文学のあり方と方向性を決めていく時期でもあつた。そのような太宰治の作風の変化は、従来、磯貝英夫¹³⁾をはじめとして、太宰が結婚して、子供を持ち、生活が安定したという個人的な事情によつて説明されてきたが、それよりも、実は戦時下という時代状況から説明する方が自然であろう。

四 太宰治の戦時下の文学観

太宰治の作風が大きく変わつて、中期と呼ばれるようになるのは一九三八年からであるが、内閣情報部が文学者たちを戦地に派遣するペン部隊が結成されたのは同年八月のことである。「文壇人にとつて(当時、ペン部隊などに作家が加わることは、彼の文学者としての生涯に洋々たる未来を約束する如く見えた)こともあつて、大方の文学者らはむしろ従軍を希望したのである。」と都築久義¹⁴⁾が述べているように、この時期はおおかたの文学者たちがペン部隊を望んでいた。しかし、太宰治はそれとは違う方向を選んだようである。一九三九年に書かれた『畜犬談』には次のような文章がある。

〔略〕芸術家は、もともと弱い者の味方だつた筈なんだ。私は、

途中で考へて来たことをそのまま言つてみた。「弱者の友なんだ。芸術家にとつて、これが出発で、また最高の目的なんだ。こんな単純なこと、僕は忘れてゐた。僕だけぢやない。みんなが、忘れてゐるんだ。」(『畜犬談』(一九三九)¹⁵)

当時は前述したように国策文学の隆盛の時期であつたが、その中で太宰治は自分なりの作品を書き続けた。同じ戦時下に書かれた『畜犬談』の「弱い者」のための「芸術家」というのが正確に何を表しているのかを推測するのは難しいが、当時、国家意識の高揚のために書かれた国策文学を目指した文学者たちとは異なる意味だつたのはたしかである。「瘤取り」に見られる人々を喜ばせる、つまり俗を志向する文学は、高みを志向する純文学とは異なる。『お伽草紙』の最後の作品である「舌切雀」の冒頭で、語り手は「私はこの「お伽草紙」といふ本を、日本の国難打開のために敢闘してゐる人々の寸暇に於ける慰勞のささやかな玩具として恰好のものたらしむべく」書きすすめて来たと述べている。この「国難打開のために敢闘してゐる人々」というのは、政府や軍部にいる人々ではなく、市井の片隅で微力ながら「敢闘して」生活している人々を指すのだろう。語り手は、その後、「私は日本を大事にしてゐる」、「それゆゑ、私は日本一の桃太郎を描写する事は避け」と言い、「この舌切雀の主人公は、日本一どころか、逆に、日本で一ばん駄目な男と言つてよいかも知れぬ」と語っている。このような駄目な男の人物設定は『お伽草紙』では、共通して見られる。弱い人物の設定は『畜犬談』で言う「弱い者」と同じ文脈で見ることができらる。先述したよ

うに、戦時下には、国のために頑張つて協力し、戦場に出て戦う人々もいれば、戦争のためにはほとんど役に立たず、当時の世間から見れば価値の無いような人々もいるわけである。太宰治自身は自分をその後者の中の一人と考えていたのだろう。太宰治が俗の文学を選んだ理由は、それを自ら選ぶことで当時の戦時下の状況で、直接戦争の役に立たないような、あるいは世間からそう思われるような人々を慰め、楽しませるためだつたのではないか、と思われるのである。

まとめ

「価値」というのは、状況によつて変わるものである。「瘤取り」は、戦時下という当時の「価値」に疑問を投げかける作品と見ることができらる。『瘤取り』の話には、昔話の勧善懲悪で見られる善と悪は無く、価値の違いだけが存在しており、その価値には優劣も無いということを表している。このような「瘤取り」を戦時下という状況と関連づけて考えると、「瘤取り」で見られる価値観の対比は、戦争に直接役に立つことを最高の価値と見る当時の状況を相対化する役割をはたしていると言える。また、「瘤取り」では、戦争に入つてから、それまでの傑作の願望を持つて実験的な作品を多く書いた作風から離れ、人々を喜ばせる俗な文学を選んだ太宰治の意識変化が見られると同時に、「傑作」に執着した初期の姿勢に対する自嘲の姿も窺われる。そして、戦時下で直接役に立たない人々を慰め、楽しませるために自ら俗の文学を選んだ太宰治の文学観も見ることができらるのである。

【注】

- (1) 浦田義和『お伽草紙』国民童話』（太宰治 制度・自由・悲劇、一九八六年三月、法政大学）
- (2) 長谷川泉「瘤取り―太宰治―」（『日本文学研究資料叢書』、一九七〇年三月、有精堂）
- (3) 佐藤厚子「太宰治『お伽草紙』論―昔話から「新しい物語」へ―」（『椋山女学園大学研究論集』、二〇〇六年、椋山女学園大学）
- (4) (3) に同じ。
- (5) (2) に同じ。
- (6) 『東京朝日新聞』（一九二七年七月二十五日）
- (7) 濹川驍は、『日本文学大事典、第一巻』（一九七七年、講談社）で、宇野浩二は「大患後純文学追及への熱意はいっそう強く、感想や随筆にその所信を吐露し、それらを集めて、『途の道』を出版したりしたが、そのひたむきな態度から「文学の鬼」と呼称された。」と書いている。
- (8) 渥美孝子「太宰治『お伽草紙』」（日本文学、一九九〇年十二月、日本文学協会）
- (9) 『猿面冠者』の初出は「鶴」（一九三四年七月）。後に『晩年』（一九三六年六月、砂子屋書房）に収録された。
- (10) 『逆行』『盗賊』の初出は「帝国大学新聞」（一九三五年十月、帝国大学新聞社）。後に『晩年』（一九三六年六月、砂子屋書房）に収録された。
- (11) 『風の便り』『秋』の初出は「文藝」（一九四一年十一月、改造社）。後に『風の便り』（一九四二年四月、利根書房）に収録された。
- (12) 『芸術きらひ』の初出は、「映画評論」（一九四四年四月、日本映画出版株式会社）。後に『太宰治随想集』（一九四八年三月、若草書房）に収録された。
- (13) 磯貝英夫は「『お伽草紙』論」（『作品論 太宰治』、二〇〇〇年十二月、双文社出版）の中で、「瘤取り」について「戦時下は、太宰にとつて、自己と周囲との一時的融和の時期であつて、「人間失格」に示されるような他の断絶感は表立たなくなつてゐるのである」が、「すべてを性格として許容することを、最終的に結論としてゐるわけで、そこには、当時の太宰の比較的に明るい心情の反映が確かにあつたと思われるのである。」と述べている。
- (14) 都築久義『戦時下の文学』（和泉書院、一九八五年九月）。
- (15) 『畜犬談』の初出は、「文学者」（一九三九年十月、上田屋書店）。後に『皮膚と心』（一九四〇年四月、竹村書房）に収録された。
- (シン) ソルファ 本学大学院博士前期課程平成二八年度修了)

